



Data

監督: 木村ひさし
 原作: 今野敏『任侠学園』(中公文庫)
 出演: 西島秀俊/西田敏行/伊藤淳史/葵わかな/葉山奨之/池田鉄洋/佐野和真/前田航基/戸田昌宏/猪野学/加治将樹/川島潤哉/福山翔大/高木ブー/佐藤蛾次郎/桜井日奈子/白竜/光石研/中尾彬/生瀬勝久

👁️👁️ みどころ

「暴対法」が施行され、世間サマの目がヤクザに対して厳しくなっているにもかかわらず、「任侠シリーズ」がヒットしているのはなぜ？

「悪名」シリーズでは、勝新太郎、田宮二郎の凸凹コンビが絶妙だったが、本作にみる「阿岐本組」組長に扮する西田敏行とNO. 2の実務派で若頭役に扮する西島秀俊とのコンビも絶妙。彼らの①出版社、②私立高校、③病院、④銭湯の「再生事業」は、ヤクザの民事介入事件ではなく、義理と人情に厚い阿岐本組の社会奉仕事業？それがホントかウソかは、暴力団とヤクザとの異同を含めて、あなた自身の目でしっかりと！

私は“パワハラ”否定論には反対だから、本作ラストに見る、ヤクザもOK？パワハラもOK？的な大団円に賛成だが、さてあなたは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このシリーズは面白そう！ヤクザの変容ぶりに注目！■□■

『任侠学園』と題した本作を私は新聞ではじめて知ったが、本作は今野敏の原作『任侠学園』を映画化したもの。これは、今野氏が2004年から発表している『任侠シリーズ』の第2弾で、第1弾は『任侠書房』、第3弾は『任侠病院』、第4弾が『任侠浴場』、そして、現在連載中の第5弾が『任侠シネマ』だ。その主人公は、困っている人は見過ごせない、義理と人情に厚すぎるヤクザ、「阿岐本組」の組長・阿岐本雄蔵と、その若頭でNO.2の日村誠司。日村は、そんな社会貢献に目がない組長に振り回されながらも、「親分の言うことは絶対！」と組長を信頼し、実務全般を取り仕切っている男の中の男らしい。

もっとも、日本では1992年に「暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律」(暴

対法)が施行され、反社会的勢力(=暴力団)の排除に向けた世論が強力になっている。そんな社会的流れの中、ヤクザの志望者が減り、今や“半グレ”と呼ばれる中途半端な人種が増えているようだ。そんなご時世の中、なぜ「任侠シリーズ」のようなヤクザ映画(?)がヒットしているの?

かつてのヤクザ映画と言えば、鶴田浩二、高倉健を代表とする東映任侠ヤクザ路線がその代表だったが、今やヤクザ映画もここまでコメディ風に変容しているので、まずはその変容ぶりに注目!それは、近時観た西部劇の『ゴールデン・リバー』(18年)や『荒野の誓い』(17年)が、大傑作ながらも、かつてのジョン・ウェイン主演のインディアンを撃退する痛快西部劇とは大きく変容しているのと同じ・・・?それはともかく、原作モノの邦画が近時大嫌いになっている私だが、こりゃ面白そう!

■■■西島秀俊・西田敏行コンビVS勝新・田宮二郎コンビ■■■

漫才はコンビの相性が生命線だが、コンビが生命線となる映画(シリーズ)はたくさんある。その1つが、勝新太郎と田宮二郎のコンビが絶妙だった『悪名』シリーズ。当時は、勝新主演の『兵隊やくざ』シリーズや、市川雷蔵主演の『陸軍中野学校』シリーズ等のシリーズものが大ヒットしていたが、『悪名』シリーズは、体格から性格まですべてに対照的な凹凸コンビ(?)の相性が生命線だった。当時は、男女のコンビでは、日活の吉永小百合・浜田光夫の純愛コンビが群を抜いており、山内賢・和泉雅子のコンビや、倉石功・姿美千子のコンビ等がその後を追っていたが、男同士のコンビでは『悪名』シリーズの勝新太郎と田宮二郎が最高だった。

それに対して、本作では、安岐本雄蔵役を西田敏行が、日村誠司役を西島秀俊が演じているが、年齢差を含め、この2人のコンビの相性も絶妙だ。本作中盤では、なぜ日村が弱小ヤクザの親分・阿岐本にゾッコンで、「阿岐本のためなら喜んで命も差し出す」と考えているのかが語られるので、それに注目。さらに、アドリブも含めた軽妙なセリフ合戦にも注目し、この2人の相性の良さをしっかり確認したい。

■■■阿岐本親分の再生事業は弁護士業とも共通性が!■■■

本作では、阿岐本親分が解説する暴力団とヤクザとの違いが興味深いのが、9月22日に観た、中国第6世代監督・賈樟柯(ジャ・ジャンクー)の『帰れない二人』(18年)でも、2人の男女の主人公は、自ら“渡世人”と称していた。日本にも渡世人や博徒の言葉があるが、それらとヤクザとの違いはさらに難しい。坂本龍馬が起案したと言われる、明治維新の「五箇条の御誓文」はよく知られているが、阿岐本組の「三ヶ条」は、「カタギに手を出さず」、「勝負は正々堂々」、「出されたものは残さず食う」の3つだ。

その第1の「カタギに手を出さず」は立派だが、高倉健が歌った名曲『唐獅子牡丹』の歌詞では、「義理と人情を秤にかけりや、義理が重たい男の世界」とある。しかして、『任

侠シリーズ』では、義理と人情に厚く、社会奉仕に目のない阿岐本親分が、毎回“世間サーマ”から頼まれる厄介ごとを引き受けてしまうのが定番。そのため、実務担当者である若頭でNO.2の日村が毎回奮闘するのがシリーズの売りだ。そして、シリーズのタイトルからわかるとおり、これまでは①出版社、②私立高校、③病院、④銭湯、の再生が阿岐本親分の大事な仕事になっている。

ちなみに、私が司法試験で選択した科目は「破産法」と「政治学」。破産法は、1974年の弁護士登録から5年目以降に大いに役立った。それは、裁判所から破産事件の破産管財人に任命されることが多くなったためだが、当時用心しなければならなかったのが、ヤクザ（暴力団）の倒産事件への介入だった。なぜ彼らはそこに介入してくるの？それは、そこにうまみがあるからだが、『任侠シリーズ』における阿岐本親分が再生事件を引き受ける理由はそうではなく、あくまで義理と人情のためらしい。

しかして、阿岐本組はシリーズ第1作『任侠書房』では出版社の再生に成功したようだが、シリーズ第2作ではじめて映画化された本作にみる経営不振の仁徳京和学園の再生は？

■□■仁徳京和学園の経営不振の原因は？■□■

破産管財人として企業の破産処理をする場合は、あくまで「破産法」に則って処理すればいいだけだが、いわゆる「任意整理」の場合は、アプローチの仕方がさまざまだから、かえって難しい。それは、弁護士として「任意整理」をやる場合も、阿岐本のようにヤクザが義理人情で社会奉仕のためにやる場合も同じだ。しかし、その場合の最初の仕事が、企業の不振の原因を突き止めることにあるのは共通している。そこで阿岐本が、仁徳京和学園の経営不振の原因を「無気力・無関心な高校生と、事なかれ主義の先生たちにある」と指摘したのはさすが。これを見ていると、阿岐本の物事の本質を見極める能力は民事再生専門の弁護士と同レベルにあることがよくわかる。もっとも、阿岐本の仕事はそんな本質を見抜くだけで、その膿を出し、企業を再生させるのはすべて日村の仕事だから、日村は大変だ。

日村が帳簿のチェック等の地道な作業をきちんとやっているのには感心させられるが、それ以上に感心させられるのは、その行動力。解決策は現場にあり！とばかりに、現場（＝学園）に、喧嘩がめっぽう強い三橋健一（池田鉄洋）、元暴走族の二之宮稔（伊藤淳史）、元ハッカーで情報収集に長けるテツこと市村徹（前田航基）や、さらにその下っ端の志村真吉（佐野和真）らと共に乗り込んだ日村は、そこで、学園一の問題児である沢田ちひろ（葵わかな）、ワケあり優等生の小日向美咲（桜井日奈子）、さらには神出鬼没なカメラ小僧である黒谷祐樹（葉山奨之）らと対面（対決？）していく中で、少しずつその本領を発揮していくことになるので、本作中盤以降は、それに注目！

仁徳京和学園の校長・綾小路重里（生瀬勝久）は、学園がもともと目指していた「文武

両道」の理想を近時取り下げ、野球部などの「部活」も停止していたが、それは一体なぜ？また、仁徳京和学園では毎日のように夜中に正門玄関のガラスが割られ、その修理のために多額の出費を余儀なくされていることが判明したが、その犯人はダレ？また、そもそもそんな「荒れた学園」になった原因は一体どこに？仁徳京和学園の再生のためには何よりもそれを突き止めなければ・・・。

■□■この父兄が狙っている利権とは？ヤクザとの結託も？■□■

すべてにコトなかれ主義の校長・綾小路に対して、大きな影響力を持っている父兄が小日向泰造（光石研）。この男の娘である小日向美咲は、生徒会の活動もしている一見優等生タイプだが、その実は・・・？小日向泰造が狙っているのは、仁徳京和学園に絡む“ある利権”らしい。昭和の時代の高度経済成長は「ブルドーザー宰相」と呼ばれた、故田中角栄の“日本列島改造論”をバックに進んだが、そこにはプラス面だけではなく、そこに生まれた“官民癒着”“利権構造”というマイナス面があった。近時の新聞紙上で大きく問題になった「モリカケ問題」はその最近の1バージョンで、ここでは“忖度”がキーワードになっていた。

また、利権構造が問題になる時は、往々にしてそこにヤミ社会＝ヤクザが絡むもの。しかして、本作には阿岐本組のような昔気質の弱小ヤクザではなく、巨大組織を誇るヤクザ・隼勇会やその組長唐沢隼人（白竜）が登場するし、小日向が経営するさまざまな会社はその“フロント企業”らしいから、問題は複雑だ。阿岐本組のNO.2で、さまざまな再生事業の実務処理の責任者である日村が、経理帳簿に明るいだけでなく、そんな社会問題の本質を分析する能力を持っていることには敬服するが、さあ、日村が少しずつ暴いていく仁徳京和学園が“ある事情”に絡んで生み出す（であろう）“巨大利権”とは？そしてまた、善意の父兄の代表顔を気取っている小日向の隠された本性とは？

それを暴けるのは、同業者の阿岐本や日村しかいないことが、本作を見ているとよくわかる。私は『学校』（93年）に出演していた頃の俳優・西田敏行はあまり見ていないが、第12回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞した『敦煌』（88年）での彼の迫真の演技には感心させられた。あの頃は精悍だった彼はその後『もしもピアノが弾けたなら』を歌い、歌の方面でも才能を発揮したが、今や変幻自在、融通無碍の演技をさせれば、彼は日本一の俳優になっている。そんな俳優・西田敏行が阿岐本組の組長として綾小路校長の前で、唐沢組長や小日向と対峙するシーケンスは迫力いっぱいだから、それにも注目！

■□■本音が満載！ヤクザもOK？パワハラもOK？■□■

本作では仁徳京和学園の理事長にヤクザの阿岐本が就任し、理事になった日村が学園再生のために動いているとの情報がマスコミに流されたため、警察が事情聴取のため日村を任意同行する姿が描かれる。これは逮捕ではなくあくまで任意同行だが、現代社会の“最

大の権力者”と言っても過言ではない“マスコミ”がこのような報道をすれば、その“世論”の高まりによって阿岐本も日村も退場させざるをえない。それが、現在の日本の一般的な常識だ。

ところが、『任侠』シリーズの作者である今野敏はそうは考えず、義理人情に厚い阿岐本組の組長阿岐本雄蔵と、NO.2の男日村に大きな共感と魅力を与えている。学園一の問題児だったちひろが“おっさん”と呼び、反発していた日村を、ある時から見直し、友達となり、最後には尊敬すべきヤクザという位置づけにまで格上げしたのは、一体なぜ？そこに阿岐本組の「三ヶ条」が効いていることは確かだが、本作を観ていると、それ以上に日村がちひろらに対して真剣に向き合った姿勢が大きいことがよくわかる。

真剣に向き合えば、そこには対立も！それは当然だが、コトなかれ主義では所詮ちひろが何に悩み反発しているのかについてさっぱり解明できないのは当然。また、一見優等生として生徒会活動を実践している小日向美咲らも、内心に大きな問題を抱えていることは明らかだが、これも“対決”（＝ケンカ）してみてもはじめてその内容がわかることだ。そんな本作のラストでは、仁徳京和学園から小日向も隼勇会も手を引き、日村やその手下たちと学園の問題児たちの大団円に向かっていく他、ヤクザもOKなら、パワハラもOKになっていく（？）ので、それに注目！こんなに本音が満載された映画、私は大好き！

2019（令和元）年10月18日記